八宗起原

釋迦實錄

へ13
4036
2

昭和42年12月12日 和田大作 寄贈

喜見城

昭和 東京都 2 1035

八宗起原釋迦實録卷之貳　　東都　鈴亭谷峩譯述

第八　惡人軀を死して善ふ飯も并佛十月ゆて臨産の論

佛母守護の諸天善神。天降て惡魔退治の。奇特を正しく目前。見つゝ。怪しゝ。憍曇弥夫人はさゝえる馬將軍も共怕ふ。怪然として脊ふ汗しゝ。惆然として言葉もなく。之後面を見合して。馬將軍は嘆息しつゝ。實ふ菩薩の言つる如く。摩耶夫人の胎内ふ。宿らせゝ王子こそ尊き佛ふ在ますゝめ。至愚凡慮ふ紛ひて。現ふ諸天の擁護ゝ。まを。摩耶夫人を鄭まで。ふ、執念深く呪咀して從ふ罪障消滅の朝めるべゝ。と一霎時黙してゆゝ。忽地腰の

0042 8644

門へ13
號 4036
卷 2

劔を拔て。自と己頸搨んとせしバ。吐焔と演き憚慢のふ。憍曇
弥夫人ハ馬將軍の。腕を拿へぬひつ。何故の自殺ぞと。宣まふ
教をうち用ひ女性の淺き御心ふハ。是非をうちぬきねバ。
嫉妬の惡念ふ。おん身を棄んと宣ひしを。諫まつるを
初〳〵ぬふ〳〵ねど。まふハ淵らぬ水なく。烈火のごと。御
んふ。嫉らひ奉りて理非邪正を。解まるとも甲斐なしと。
思ひしをうろ俺さへも。俗ふいふ陰裏も約るふて。その
機緣の宜るまうと。願ふ。公の邪より。現在のおん同胞なる。
妹夫人のおん命を。邪まく計し大惡心。天條邪竟るべき。神
通自在の魔仙も。非道邪術の惡鬼顏。現せうとある
集樂の。地獄へ墜し形勢を。用ふ親て孰の糸費をせざ
らんや。余耳這ふの。後日迦毘羅城へ。再ふ。ふバ。自殺

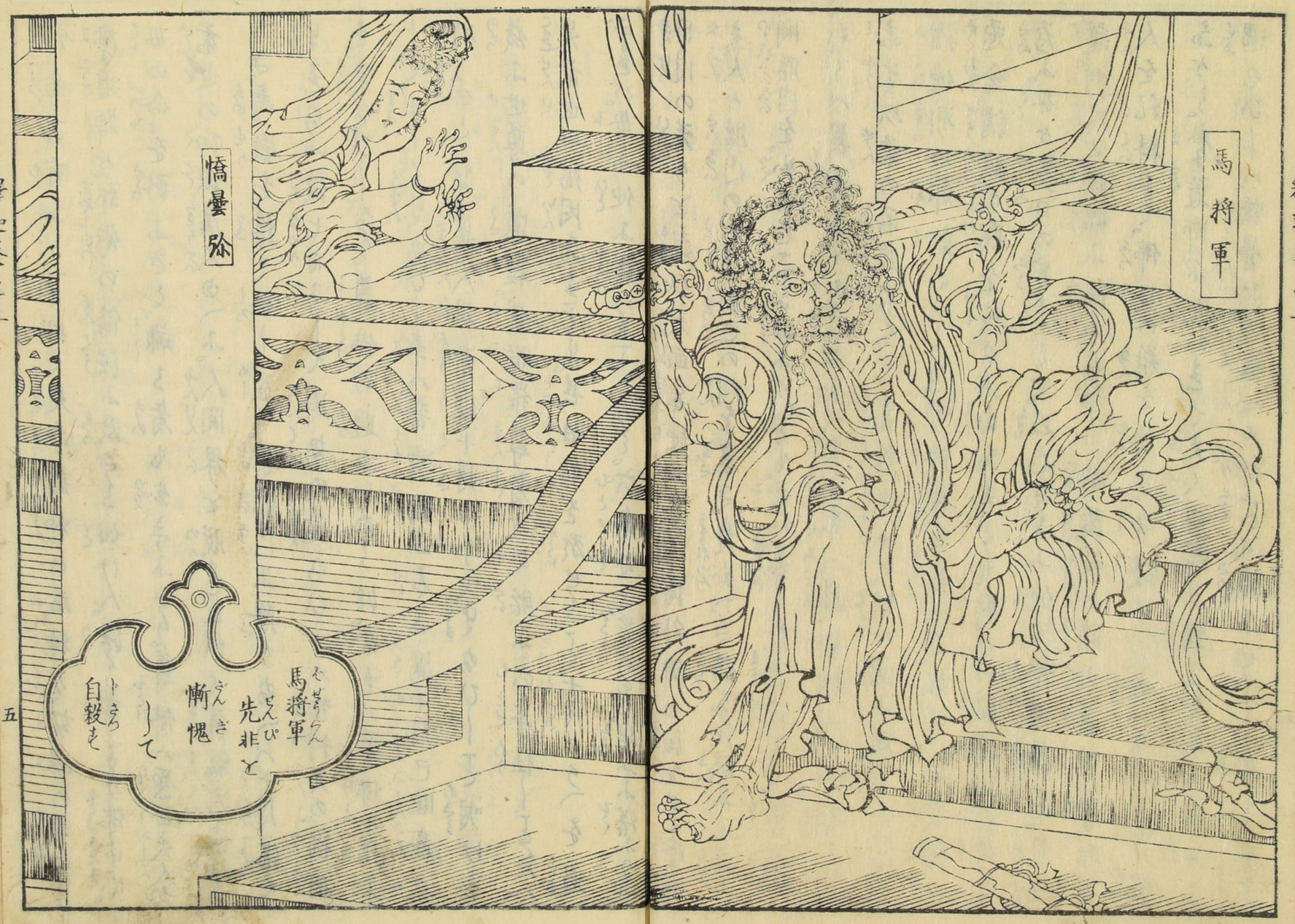
自得の罪を。答し解よう。亀うるべし。只今微居自殺して。
茲ふ命を須もとこれハ。馬將軍こそ榮利の與ふ魔仙を信
じて邪法を修しつる。密計忽地惡願して自害せりと
披露しぬ。罪微居一個ふ。ありて夫人のうつふハ羅る
まし。然もバ這後ハ大惡念の。嫉妬を深く慎しぬて。
おん同胞贈〳〵邪〳〵死。他人の嘲を防きぬ。五十年の
非をぞ知る。馬將軍ふ今般の一言。努々忘まること。
先非を悔て惡心を。翻へして善知識實ふ。の死ぬ時
ふ真鳴聲いと哀しく。人の死ぬ時い言善くも思ふ限と
うた遺を教戒いとも切ふ。まバ憍曇弥夫人も今さしふ頻
りふ後悔しぬひつ。夏売をめて夏と奏る。淺まし死茶止を
自己慚愧ひぬひてハ。落涙のろ先り。余をハ善惡態

報の理をしも悟ぬる。馬将軍ハ這程の。悪念消滅邪路
得脱。弥高うし煩悩の。山も摩けて真如の月を。何
胸も晴渡りて。末期の心最清くも。今ハ暇を賜るべしと。
自首を捐落せバ。迸る血の开ぐうへ。ふ。躰ハ檀と仆るゝ。
夫人ハ涉る高体ふ。右渉ふらをぬひつ。家居とハいへ萬の
事を。棄ねて杖とも。拠とも。憑し者を方見や。妾ゞ仏の
寵より。可惜忠臣を死ふしゝ。此も彼も皆ひらゝの
罪を。那ゝ遺言ふ。残して彼身ふ被さるべきとえりふ
して今更ふこの身ふ造りし罪科を。自地ふこの身ふ被
とも。因をふ結き魂窮。馬将軍ハ嶺せし。結て忠死も西
餅とありてハ。彼ゝ志を失るゝん欲。死を以忠を全う。
妻ゞ與の恩人ふ。死後の汚名を被んこそ心苦し。如限り

あるを。悲歎ふ堪ずゆひしゝが。斬て果べき事ゝねバ。家
事を偏ぢ明せらるし。腹ゝの如官ふ命し。馬将軍自
殺のようと。官人們ふ告知ゝして。夫人ハ懐内ふ入ひ。呼号
わりて。奮発ゆひぬ。憑馬将軍の先見違たゞ。悪事千里を
走るのあゝひ。調伏の密事熟ゝ漏て。迦毘羅城ふ聞ゆ。
原東摩耶夫人のおん病着も。這故ふやゝんもゝんと。
諸の官人們おのゝ情々地ふ結ひつゝ。月景城の動揺と
霧ひ歎ふ其沙汰ゆらゝき折ゝ。馬将軍自殺し去故
煙ゝ多馬将軍の野嶽と流て。葬の儀を免さるゝ。裏
屍を野ふ捨ゝり。有斯バ馬将軍の忠死実しゝ。憍
曇弥夫人ふハ。毫も恙ゆき。馬将軍の志を。想像ふ造りし罪のゝ恐しくも自

地ふ。後世を吊ふさへるさけ無き。彼才の果を傷こゝなひ。
追福供養を密々ふ。執行せゆひより。余を魔仙の燒
死しより。馬將軍慚愧して。壽を捨て諫しゆへふ。憍曇
弥夫人ゞ嫉妬の惡念。南て解てハ却ふ。先非を悔て妹
摩耶の。安全を祈ゆ。大善女と成ゆへ。摩耶夫人
の病患も。漸くふ愈ゆひて。平せよりも快く。清亮ーく
成せゆへ。鄭てい聽て十月ふ滿ハ。平産めるべしと淨服
王の歡喜ゆこと限りもれく。朝廷の群臣安堵して悟こ
ぢぬ者ハ無し。是都盧摩耶夫人を。諸天善神守護し
ゆひて。惡を懲しゆひし故あり。如斯擁護のある故ふ。十月
ふ滿て新産くも。太子降誕ましーけるを。佛ふ憍曇弥ゞ
嫉妬の與ふ。魔道師ゞ咒詛所の。磐石無羽の邪法とりて。

日月の光りを覆ひ。天血妄池血妄。閻浮外傳の法をめて。摩耶
夫人ゞ胎内の太子出世の門を塞ぎ。産出づき路あれ故ふ。三年ゞ
間胎内を出ぬたざる由ふいくども。斤ハ甚しく紀悪説あり。茅余も
めゝバ異常あて。十月のうへを二年二月。母胎を大く苦しむる。
未生以前の不善子あり。豈然乎々々。妊ハ德ふ勝むといくゝ。
借使聊の邪魅ありとも。那佛德を覆づき。妖婦憍曇弥ゞ
惡念消滅の期を俟ゆふ由あるまじども。斯てハ妖婦を紀度せん
為ふ。母ゞ多日の苦しーこと。思たざるふ似て佛德ー。且初
護明大士。母胎ふ降りゆひし時。隨從の諸天善神。摩耶夫
人を礼拜して。佛母の新を除き。守護せんと。嘆くゆひし言有
ゆゞ。摩耶道師ふ咒ハ生て。夫人の胎く惱るを。余ゝも無ふ
過ゆひしハ。憍曇弥ゞ妖心の邪火を。熾ふせどと思ーゆ。


馬將軍
憍曇弥
馬將軍先非を慚愧して自殺せ

神念ふハ有るべけれど。是ハ諸神の威神力。妃婦の思念と
摩道師ぞ。邪術の修法ハ及ぶる如けん。況る事より佛せて。
母の命を取ふきと。離る者も出きふ。尊佛ハ原母夫人ぞ。
前世の功徳廣大ふ。人間界を脫ぬひて。其魂天ハ昇る
べき。壽數を豫て知し居て。其胎内ハ降りぬ。十月滿て
生まるのハ。後七日ハして。摩耶の夢ぬひしハ忉利天の。福相
を受ぬひしるり。尊佛の過ハ。ふ。余きバ尊佛十月ハ
して。正しく生ぬひし事ハ。普曜經ハ太子滿十月已臨産之
時云々とあり。是人界常理十月ハして生ぬひしと。
後ハ世尊の遺體羅睺羅尊者ぞ。母胎ハ六年在しとぬひ。
是前世の宿因ありとも。其妊娠を取せること。十月のうへを過
ざるバ。母子他ハ絶つまじ。のゝ。六年母を苦めぞ。思ふハ偽ハ
氣孕歟。猶考無ハ有ねど。理と寛めて妙を考ハ。理外の理ハ
佳境ぬるべん

第九 佛母夢ハ因果を知ぬ并相師吉夢を判ぜ

再說佛母摩耶夫人ハ。諸天善神の守護ハよりて。惡靈障碍
退散しつるバ。其分ハ新しも知しめさねど。労患漸々ハ癒て。
甘露を服しぬひしごとく。最快く在せしうへハ。音信絶し姉
夫人より。世間ハ消息とりて。日毎ハ訪も問ぬハ。誠を毫ハ取
まじきバ。原來姉君ハ閑心ありて。妾を嫉ぬひしふんど。
沙汰しつるハ由もふき。讒呪の佞言ハ。薄情なりきと歎息
しぬひ。猶姉夫人を尊きて。姉妹睦ぬハ從ハ。一夜摩耶
夫人の胎内より。光明赫奕照しつ。異香馥郁と薫りしが。
僧の夢ハ示現しぬひし。菩薩ハ玉のごと紀嬰兒と成ぬひて。

乳房の間より現ぜゆひ。夫人を礼拜しゆひつ。母君よ所ゆひ
ね。我が沸腹ふ孕りしより。幾許の苦惱を受ゆんぞ最悲し。
抑我しおん身とん。前世の善因ありて。現在ふ同胞の姉妹と俱ふ生を
夫人ハ。七百生の惡因ありて。此世の善因ありて。沸身と姉君憍曇弥
ぬひおがら。過去の戒行倶美き故ふ。おん身ハ王の寵愛厚く
因位の惡行深き故ふ。姉夫人ハ寵愛薄し。之や深き惡因の
然〳〵むる所なり。汝をもて姉夫人が。嫉妬の毒念熾ふ。
頃恚の却火ふ其身のくゝろ。沸身を焼たる魔仙を焼馬将
軍の壽を断て。惡業まさ〳〵深く成しも。魔仙ハ自業自
得ふて。惡を懲を佛力ふ。八奬泥犂へ墜しより。馬将軍ハ
非を悔て。性の善ふ帰しより。一心既ふ成佛せり。這功德ふて
姉夫人の。惡念忽地消滅しつ。大善女と成ぬべ。茲ふ至りて。

姉妹が。惡業因ハ消絶て。佛果を得ゆん沸身の與ふ。今ハ障
碍も無ゆ。今更由を知ゆんとも。姉君を恨ゆ。一時の
嗔恚ふ倶眠却の。善根を焼弃てん。人と生まれ甲斐なく
夫人界ふ二福あり。萬物の霊なり。人と生まれしハ一箇の福
その人倫の中ふも。萬の事の道理をも。知る身と成ハ二箇の福
亦然その深理を知る。是二の福ハ十定の掟なしも
守るふあり。其一ハ身尊くとも。財きを捨ることゆ。其二ふハ身智
ありとも。愚なるを捨ること無く。其二ハ身道を修して。惡人を
殺ことなし。其四ハ身富て貪きを捨る事なく。其五ハ身盛ん
なるを養〳〵を捨る事なく。其六ハ身脩て。怠ることを
捨ることなく。其七ハ身識ふして。偽を捨ることを無く。其八ハ身
明ふして。暗を捨ることなく。其九ハ身明ふして。暗を捨る

事無其十八因果の縁を知て。他をも恨べうもなし。是を国土の十因といつり。這捉を知ずして。生死をるゞ者ハ。所謂人面獸心ふて。生死をるゞ畜生道ふ。墮落しうるふ異るゝまで。都て因果の理を悟らざるべ他をも自をも。恨て俺ゝ悪鬼地獄の衆ふ逐ひ侍るなり。善因果とのゝいへべ。婦女子ハ悪しき事なりと。余いふぞと思ふべるまじど。因ハ因。果ハ果ふて。世の中の萬の事ふ。必ず咸因果あり。因ハ縁なり。果ハ菓なり。木の根の因あるべ花を呈ド。實を結の果あるがごとし。譬ゝ悪人ありて。人の物を盗ゝ。我物と為ハ因なり。縛五他ふ那まして。竟ふ刑らるゝハ果く。是悪の因果といふべく。亦善人ありて仁慈深く。他を恤む因なるべ天是ふ幸ひして。其身ふ福を受るハ果なり。是善の因果といふべ。花世の因を知まく欲さば。今生まて受る所の貧富貴賤

是ふして。前世の因を今生で果まるなり。後世の果を知まく欲さば。今生なて行ふ所の善悪邪正を推て知るべし。現在の因を後世で果まるなり。余まべ善根ハ善因ふて。善種を植きべ善実を得。種ハ因なり。實ハ果なり。菓を種きべ菓を生ず。稔ふを蒔べ稗生ず。上因といへども稔ふを蒔て。菓を得を欲べうぞ。下因といへども菓を蒔て。其種稔ふふハ成べうぞ。善悪ともふ自種て。自是を得るなり。然るふ世の人恐ふ。悪行をして幸福を。得まく欲まハ稔ふを蒔て。菓と成さまく計ごとし。寔ふ是愚なるまでや。只這因果の理を悟べ。唯ち怨ゝ孰をハ悪まん。幻の世ふ生を稟て。淫なる命数を。喜怒哀楽ふ觸沈ゝ。愛着の道ふ辟して。或ハ名を售。利を貪り。他ふ負ごと事ひつ。一事作善の行ひなく。後世の

嘗もせで空しくも世を送りて滅猿しけるこそ。此や旦の霜。夕の露と消ぬべき人の命なれども。無常を観ぜぬ道ひのこと。今毋君の尊きこと。轉輪王の妃ふまりく。金殿玉楼ふ傳うるこそ。綿繡羅綾ふ纏つるこそ。栄花も唐是冬の日の影よりも敢果なくて。生者必滅の理ふ。閻浮の塵と成ぬるこそ。然バ愛着の絆を離。一心ふ佛果を願ひ。無為の快楽を極めぬひね。九もたや月満ぬるこそ。降誕の日遠うくむ。めたこそ。侍女を敬こそ。最懇切ふ因果應報の理を説法しぬひ。且迦日ふ降誕の義をさく示しぬひて。頼て示母夫人の乳房を分て間より。胎内へ入せ給ふ。摩耶夫人ハ除波情さふ今妻時候せ給へと。留め給ふ御聲ふ。愕然として覚まべ。御帳の内ふ在しまして。稽顙ぬひし夢ふそ。夫人ハ夢の始終を。熟思しつげ給ふ

敢て疑ふ事ふ無と無く。一句とふ暗記しぬいハ。猶胎内の王子尊くも。示奇事ふ思ひ給ひ。昨夜王子の現ぜ給ひて因果の理と降誕の迦葉を示しぬひ。因を結ぬ〳〵ども。姉夫人ハ嬢妬の事ハ。無むりも漏しぬ。其。開ハ憍曇弥夫人の心中を斟そ王の知ろし呂さ。踈うて暗記しぬいハ。猶胎内の王子も。況て今ハ善心ふ歸て。ぬひし姉夫人の舊怨報を事て漏さん。今ぜバ其它ハ遺も無く。隠ふ記ぬひし隨ふ。如此々と結ぬひて。正しく示現ぜし。王子の誕生遠うくも。妾ハ今日より別て。牙を清め侍らんと。養しぬ〳〵浄飯王も。奇夢と屠感ぜし。夫人の意ふ從しぬひし男ふ魯の夢想といひ。所が正しくも。菩薩の降誕ふ正しくも

あるゝん。朕も宜しく慎まて。阿嬢ゝ行ひ不隨ひあんと。尊敬深くも宜ひて。此よりハ摩耶夫人を。おん母ゝ姉君の。ゝくゝふ思しぬひつ。敢て慈想の膚心ハ。落だゝりも在しまさゞ。余夫人ハ示現の隨ふ。おん身を深く慎まぬひ。栗棄二毒ハ一の卷存在し

涉さねど。八禁清淨の。（犯せせも。偷盗せも。婬せも。妄語せも。酒とのまも。香を焚ふつハも。歌にをいも。高きあさ床といもとをハ禁）

斉して。六波羅蜜を修しぬハ。是威淨尊迦の故。おん斉戒

厳りて。馬將軍夫婦怪びつ。心を副てぞ冊きける。淨飯王ハ

夢想の示現を。怪ひぬハ。不有ねども。除り不奇異思しぬひて。

夫人の身のゝ胎内の。王子の吉凶幸何そと。計解ぬひしゝハ

夢のにを為せなやと。由を知命ありけるあらそ。觀相不思議なる

婆羅門の相者數十人。微ふ應して青龍蹲の王殿ふ參内

して。王の做せる美人をと。聞しふ勝る摩耶夫人が同色王貌と

相しまつるふ。感淺まし。凡夫心。恍惚として一回ハ。醉るがごゝく成けるも。稍已と思ひ返して。熟と觀相しつ最初のおん夢想を考合をふ。寔ふ是善表ありと。相師ゝ各々衆議して。おん夢の判を記さ。其文ふ曰

若母人夢見日天入右脇所生子必作轉輪王
若見月天入右脇所生子諸王中最勝若見白
象入右脇三界無極尊能利諸衆生怨親悉平
等度脫千萬衆於深煩惱海

是を淨飯王ふ捧まつりて。恭しく涙るゝ。后妃の王相と稟。おん吉夢と。勸考し奉るふ。高徳天地ふ等しくるべき。王子御平産ふ候さんと。相師ゝ各一奏聞しぬまハ。王ハ深く歡喜ぬひて。相者ゝ各ふ多く財を賜ひ。遠折ゝ菩婆大居

ふも。金銀絹帛若干ふ。莊園多く賜たりて。俱ふ賜を賜ひしより。菩婆ハ其頃日支国ふ。活人草ありと聞しりバ。わたき遠珠草を採て。善く人命を救たゞやと。己が国王ふ聞え上て。長途を厭ハず數萬里隔てし。日支国へゞ旅行ける。柳遠活人草ハ。死をせふ回ふ勿論常ふ一度服をれゞ。病悩ハ忘しゞく。劔戟も軀を傷らぜと。迹異記ふ識しゝり。余ゞバ其後年を經て。菩婆ハ僅一莖一實を。猶採得て歸国しつ。菓園ふ之を種て。多く人命を救ひしが。人公天ふ殺ける時ゝ。後ふハ遠種絶果て。日支国ふも今ハ無しとぞ最惜しりる菓草ある哉

第十　花浄堂を造る溢觴并悉多太子降誕

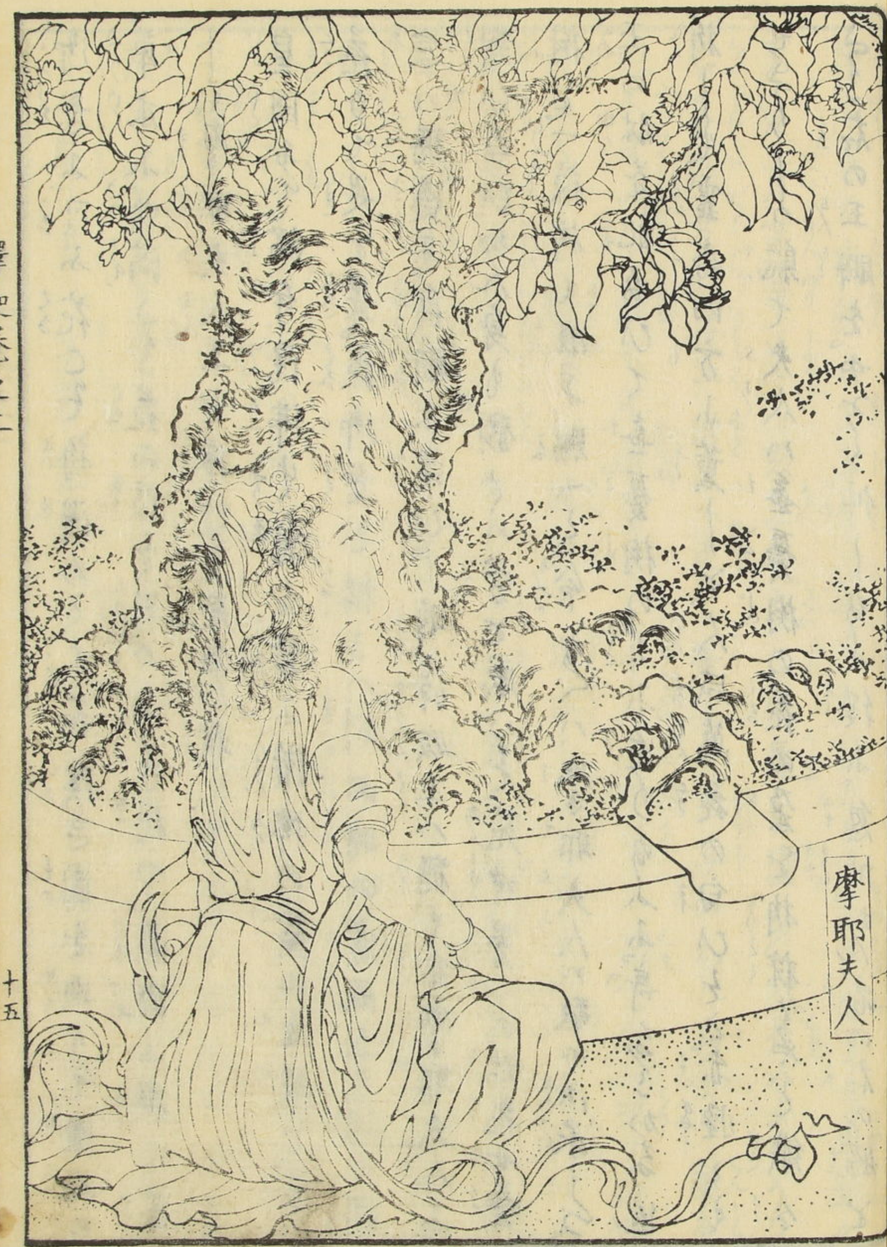
轉輪王代々の樂所ある。藍毘尼園と聞えしハ。廣き池蒼海のごゝく。然も連鱗ふ似て。亦粼々たるハ漢のごゝく。金剛石或ハ水猜。或ハ吹瑞瑞をりて積重ねし。築山処々ふあり。波須弥山ある圓浮樹より。落る露ゞと世ふ貴珠。圓浮檀金と砂利ふ蒔り。鶴ハ汀渚ふ鬻を鳴して。千歳の壽を娯しこ。黿ハ岩根ふ尾を伸して。萬世の齢を保つ。萬国の奇樹異草も。種々の珠花を呈ゞて。十雨ふ沾ひ五風ふ戦く。就中園中ふ。隨一の名木しる。無憂樹ハ今を盛の。花の色香を傳可ふ。孔雀鳳頻伽嘲る。現ふ仙境の風色景致。其中央ふ清滝殿あり。土木の精工善美を尽しして。楊閣高く聞廊長く屋棟ハ聳て夏山のごゝく。勾欄衡りて春霞のごゝく。鴻磯の欄珊瑚の柱。七宝八珠延満して。極樂天堂の宮造も斯やと思ふぞゝり。余ゞハ遠藍毘尼苑ある。無憂樹の盛る頃ハ。花の宴を

催して。君臣樂うを俱ふしつ。暴平を唱へうる王。年毎の順例あるふぞ。淨飯王ハ摩耶夫人の所勞全く愈ぬひしふ。
暦慮を安んじぬひしに。折うう。四月の初ふありしうべ。伴の亀優樹爛熳うる。花の盛を僥倖ふ。例の大蕪を催して摩耶の心を慰めむやと。勅命ありうるふぞ。迫ふ宣旨を奉りて青龍城の傳官うる。馬將軍に傳へうるべ。摩耶夫人恪びぬひ。領掌の旨慎で。面奏しぬひうり。依て月景波梨舎那。並那離の三宮をたづぬ。後宮の女宮。月郷雲容。當八日藍毘尼園ふて花の宴を備をふより。各糸集まるべ。殘る方ふく詔命ありて。俄ふ藍毘尼園を灑掃し。清掩殿と莊嚴を。有司们迭ふ勵こつ。所幸の營を做を役ふ。早くも當日ふありうれば。国の兵士十萬餘う。苑の四方と警護して。專非常の備とし。殿中ふ年二十才前後ある。才色勝まうる採女一千人。撰こふして。宮侍の役とし。容顔美麗の童女千人。身材長短ある紀を撰こ。瓔珞彩衣を着せて。香華を執しめ。殿の中央ふ淨飯王の玉の牀。左ふ摩耶夫人の坐。其次ふ莫蓉夫人の坐。右ふ憍曇弥夫人の坐。その次ハ好容夫人の坐と。次第正しく設うる。余る役ふ王を庸め。四殿の后妃。今日を礫と。猥褻を解しぬひて。儲の玉座ふ着ぬべ。二光の大臣より。月郷雲容冠を双べ袖を連て羅列つる。梵天王ふも劣りぬる。君の威德を礼拝し。且恒くも四夫人の。光景を仰見まうるふ。何も絶世の美人ふ在せど。別て摩耶夫人ハ傳ふき。天性の美ふ在しまもふ。心を用ひぬひぬる。猥褻ハ是甚麗ふうる。首ふハ七宝の瓔を鬘うる冠を

瓔珞者西域記云在頭曰瓔在身曰珞花鬘亦西域女子首飾也云云今本邦僧侶以其形用佛具

戴き身ふハ羅綾錦繡を纏ひ。珞の飾眼を驚うを。碧玉の帯真紅の裾。丈ふも餘る鬟ハ。瑠璃を暢うるごとくふて。雪の顔面丹花の唇。緑の眉曼くして。国色嬈娘うる光景ハ。将ふ柳の容ふして。楼の花の景色を巧こ。梅花の香りあるごとく。花鬘の光輝。緯衣の上級美色。四下羞明き如菩薩ふ。向よるもの已を忘て。開きしにを閉もせず。憮然うるも多うりけり。浩きバ三殿の后妃を南。二千の女宮も忽地ふ。影色を失ひて。満月の影ふ衆星の。光を奪ハ是しふ異ふるねバ。憍曇弥夫人も輝くたりの。摩耶夫人ふ面を見て。實ふ麗ハしき姿よと思ハ。専姉ふ。なるも。其身を卑下する心と滅て。嚮ふ造りし嫉妬の罪の。そら恐ろしく浅猿く。羞きと百千扁。密ふ悔をぬふるべし。余る程ふ官侍の嬪女童女嬪人ふ多ふく山海の珍味を盛る。孫王の杯盤を捧ぎて。座狭まで安挑ぶをバ。王ハ龍顔麗しく。鱗を拳ひて。先摩耶夫人ふ賜ひてより。献酬交ふる程ふ。伶人舞楽を舞奏て。御遊の興を添るふて。君臣深く歓喜ふ入て。娯楽限りも无うりける。浩きバ王ハ御觴の数を重ねひつ。醉ふ乗じて宣ふ。這盧毘尼園中ふ集め種うる珠華寿木を。一朶うた猥ふハ折採ことを禁むとも。今日ハ摩耶が意を慰む。忘憂の樹ふ。一わきバ。垂憂樹を除くの它ハ所有華木の花の柯を。各一枝づ折把て。摩耶の前へ捧ぐて来べし。備摩耶ハ开ゲ中ふ意ふ可ひし。花わくバ食て是を粉ふ擦べし。其花の折主ふハ。多くの被物を領せんと。数多の宮女ふ命せ給へバ。女官們奉りて悅びつゝ。花を后妃の

藍毘尼苑ホ摩耶夫人無憂樹を手折


摩耶夫人

御意ふ可ふ花こそ折得めと大家廣き園を巡りて億兆の
草木ふ咲満うる花の枝を思々ふ折つ。花貌ふ挑て恭
しく摩耶夫人ふぞ捧ける。是ゐん我
皇国ゐて。諸寺院佛せ會を嘗ふ濯佛の龕の屋揀と。草
花ゐて是と葺。花御堂と稱るへ。則此時の遺風ゐり。恁て酒
宴ハ猶盛ふ。良酬ふ逮び。時。淨飯王ハ猶も赤摩耶夫人ふ
對ひゐひゐん身も願くハ労を厭ハそ。苑中第一の殊花を贈
樹を。一枝折て朕ふ賜へと。命ゐくバ摩耶夫人ハ敬て承しゐ。
玉の掬を記ゐひて垂憂樹の下ふ近りゐふふ。奇ゐるかふ遠
折しゐ。霊香四方ふ薫しと。人咸萬花の白ひそと赤淫ゐも
せざりしふ。恥て夫人ハ垂憂樹の花の朶を折採ゐと。纖々
うる右の玉臂を。ゐをゐ伸しゐふ。忽地ゐん衆の右の脇と。

接開きて突然と。王子降誕しゐひゐ。當下地より車輪の
ごゐ。青蓮華生ゞ左上ふ。太子ハ産を隨ゐくバ。是ゐを。
君臣侍女們。斉一遍り〳〵走ア寄しゐ。王子のゐん身より金色
の。大光明を放ちて普くも。二千大千世界ふ滿もゐ。照うる
沒ゐふぞ。射眼さふ慴辭て。逡巡しつ思ゐ。天うち仰げバ
虚空ふん。四天王天繒をゐて。宝几ふ置。帝釋天ハ蓋を挑ゐひ。梵
天王ハ白拂を翫ゐひて。其左右ふ立ゐくバ。難陀。優婆難陀の
龍王兄弟。金色二脇を現ハして。左ハ温水を吐き。右ハ冷
冷水を吐て。清淨功徳の雨を降し。王子のゐん頂より澡浴し
つ。諸の不淨を去ゐきバ。諸天諸菩薩来降しゐひ。妙華を
散し。妓樂を奏でつ。王子を敬礼しゐ。帝釋梵王四天
王。二龍と共ふ赤蓮華の。

臺より下りのひて。獨自前へ二足。後へ四足歩このひつ右手を天を指しのひ。左手を地を指しのひ。微妙の初聲を發しのひて。四維上下唯我獨尊と。師子吼しのへ。都尊い哉後ハ。
無上道を成しのひて。釋迦牟尼如来と稱へ奉るハ。這王子
既ハ王子を産のひて。心禪定ハ入ずゝく。無生法忍の形を
收めて。無憂樹の下ハ安居のハ。傍より我怒りて。潔き靈
泉湧出しゝ。甚水いとも温るり。偉の奇特ハ衆人ハ驚嘆て
ゐも出し得ざると。憍曇弥夫人ハ傳の。女官ハ命ハ
て。件の温靈水めて摩耶夫人の。ゐん身を清淨ハ深ハしむ
鳥將軍ハ郷の徒祿ハ。王子を渥ひ奉り。界殿して深殿
の。齋質ハ入を奉るハ。王ハ方僅眼前ハ。不測の奇現を見
て。何と分よ在しゝ。ほさねど。實母子の恙なきを。他事ハく
念ゝのひしゝ。最健ハも玉の如き。王子の容貌を爾して。大
ひハ歡喜のハ。ゐで殿上殿下の諸人も。孰り收び勇まぎらん
や。威萬歳を唱へ。慶賀しまつりぬ。當下王ハ烏將軍ハ命ゝ
のひて。摩耶夫人を輦ハ乘まつらせ。青龍機へ還させのひつ。
王子ハ憍曇弥夫人ハ抱ゝ奉て。俱ハ蓋毘尼園を立出のくば。
女官および百司百官。前後左右ハ侍奉し奉りて。非常を驚き
國兵士ハ。整々と國境を。路を徐行てゐ王宮へ還御ハし
奉りけり

十二 灌佛諸香湯の方并佛生日異說の辨

今本邦毎歳四月八日。諸寺院ハ於て。釋迦の誕生會を營むハ
花御堂を車の和解前ハ造りて。其中ハ佛像を安置し。諸香湯を以

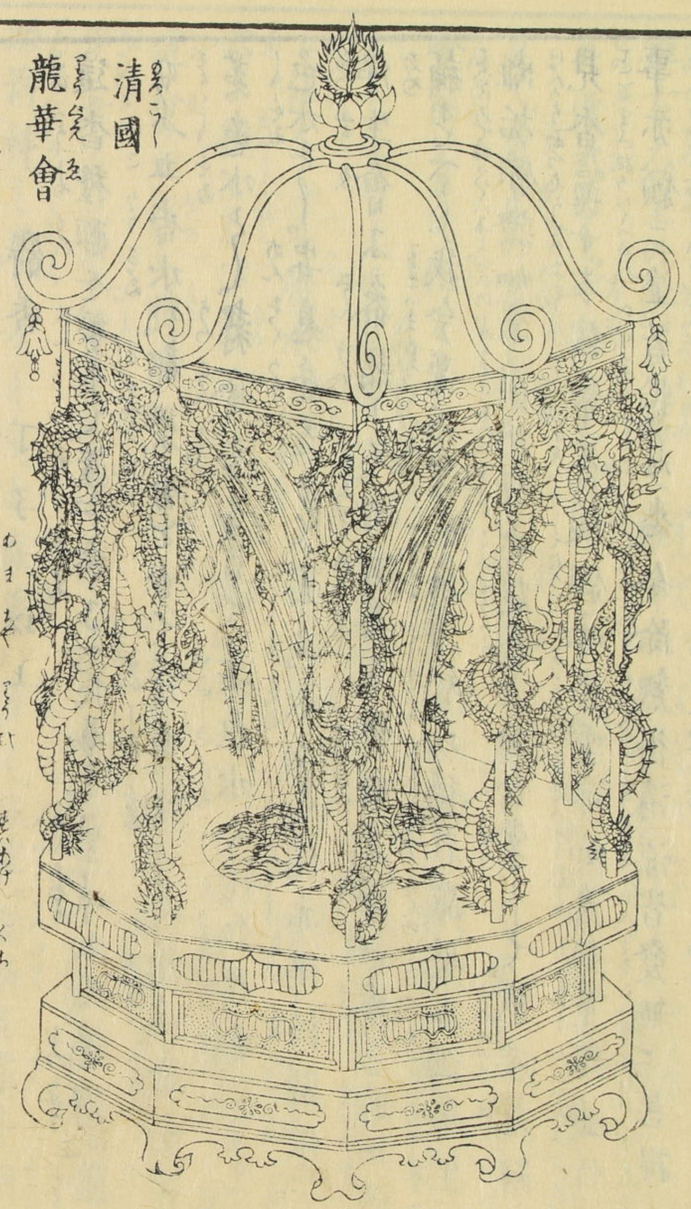
灌ぎ奉るハ。正ふ王子降誕の。瑞應を表せる也。人皇三十四代推古天皇の御宇。始て灌佛の龍華會行ひ。禁中ふ於て其儀式あり。正安殿ふ山形を造り。佛誕の状を摸し。五色の絲をめて。草ふの花を結びさゝる。玉簾を掛ゝ〳〵て。葉を北の方ふ置金鋼をめて。佛をさゝる。五寸六歩の誕生佛を。黄金の盥の中ふ立しまいゝ〳〵せ。衆僧修法ヲ行ひてより。天皇親五色ふ分ちし。五盥ちゝる五香水俗間ふハ甘茶めて。三度佛躰を灌て礼を作しめべ。次ふ親王及び宮妃大臣。階位の品ふ隨て順拜し。灌佛ー奉る。這會を行ふ時ハ。人咸界外の大道ふ趣き。疫神退去て。国ふ災垂しとゝや。今諸寺院ふて行ふ修法ハ世の人年毎ふ系治て眼前拜ゝ奉るゞごゝし。千歳藥ハ多く。甘草。雲脚を煎ド用ゐ。本方ハ牛頭　栴檀　紫檀　多摩羅　香松

芎藭　白檀　鬱金　龍腦　沈香
麝香　丁子
以上

這香種類を煎ドて。灌ぎ奉るべ紀なり。禁中ふて佛頂ふ灌ぎめふ五香水ハ。都梁香をめて青色水とし。附子香をめて黄色水ゝ。鬱金香をめて赤色水とし。丘降香をめて白色水ゝ。安息香をめて黑色水とす。猶亦佛法歸依の人ハ。佛生會ふ參詣して。自甘茶を佛躰ふ。灌ぎ奉る時此偈を誦まべし。我今灌浴諸如來淨智功德莊嚴聚五濁衆生令離垢願證如來淨法身亦燒香ーつ合掌ーて。戒定慧解知見香遍十方刹常芬馥願此香雲亦如是無量無邊作佛事亦願三塗苦輪息悉令除熱得清涼皆發無上菩提心永出愛河登彼岸と唱へつゝ。悪心消除ーて念ーまつる。作善

九條竜亭

這圖ハ清俗紀聞ヨリ見くさう



清國
龍華會
灌佛之圖

○千歳藥を龍尾より吸上て口中より吐あり迴環て竭ざるの仕掛あるべし

○右の圖ハ當世清国の諸寺院ヨリ佛生日ヨリ其堂中へ設る所の誕生佛なり　皇国の花御堂ヨリ相同し　今まても其形ち至り盡して甚奇觀ヨリ過ぎ推量ヨリ俗ふうん放开ハ左もあき右もあき世ヨリ三寶飯依の人最多きをハ和漢ともヨリ異なるぬを知るべしの

○佛生會を龍華會と稱るをハ往古龍華樹（菩提樹）の下ヨリて弥勒菩薩始て正覺を成しぬひ三度説法ありしより當来弥勒ヨリ逢奉る結縁として佛生日も亦龍華會といふなりけり

清俗紀聞

○四月八日釋迦佛誕日ヨリて寺々九條竜亭を堂中ヨリ設け竜亭の内ヨリハ盆を居り檀ヨリて刻こる釋迦の立像を置右九條の竜口より香水を出し佛躰ヨリ灌ぐ仏持ふらびヨリ大衆笙簫笛を吹鈴を鳴し小鼓雲鑼等を打樂を奏し佛事を行ふ故ヨリ諸人參詣多し　上以

佛生日也誓古畧曰當周昭王九年甲寅之四月八日云云以這說考年數佛在世七十九年相合減度歲茲者據周書異記之說而識之猶考

伝心の功德ふ依て。今生あてハ幸福多く。来世ハ天堂極楽へ生
るゝと。願ひ奉り。既ふ世尊の教ゆひし。尊記教諭多くわ是
ども。本編情數限りわきバ。文繁くして紀まし難つき。霜宮檀
那寺の伝持ふ同じ。實や教法二国ふ傳来して。千歳の後
まうでも。衆生を済度しゆふ。釋迦文佛の尊記とせるごふ
光明を放ちて。大千世界を照し。ゆひしゝ。毎ふ飛り役けぬゝ
虚說ふハゝ。中華周の昭王二十四年四月八日山川震動
して。五色の光西ふ現たる。古文獨由奏して曰。西方ふ大聖人生
ゆひしあり。一千歳の後其教此国ふ及ぶと。是たゞ誕生
の日なり。數萬里の遠き中華まで。其光の現つまして。大光明
推て知るべし。法るふ依り佛生日ハ。二月八日といふ論あり其故を
問ふ。周の時ハ子の月を以歳の首とあるまバ。今の二月を正月
とあり。徳まバ周の昭王二十四年。四月八日ハ卯の月なり。廼是二月
なるを。昔と今と建支の違ひとして考へも。猶四月とをて佛生
會を。営むハ謬説。云々とあん論じ去説あり。是ふ依ふ説ハ涅
槃會も亦當ふ十一月十五日なるべきれども。經文ふ據ハ無ふまた。
涅槃の説ハ佛世尊ゞ滅度の條ふ説しふ。世尊世ふ在せしハ。
周の昭王。穆王の代ふ當まバ。年と中華の年月ふ撮合ふり
影のごとく。四月二月の異説あり。畢竟子の月を正月と定むも。
中華の法ふして。天竺の制ふわゝまず。昔天竺の經卷漢の永平
年中。始て中国ふ傳へて。飜訳せしゝ。數回衆議を
經て周の世と。天竺と。建斗を深く考へて。年月を合しまバ。那
覚東あれ說を設けん。周の年月ふハ當まども。時候ハ全く宮の
月と。歳首と為し去夏正ふ從ひ。飜訳者の定しあまバ。今の

四月八日ハ賞む。佛生會ハ謂ふ〻ま寅の月を歳の首とせしへ。
周ハ二代の称ふる。禹王国を夏と号して。寅の月を以歳首と
去ぬ。是を人正といひ。夏正といふ。其後周の代ハ遠りて子をもて
正月と定しゝ。周滅びて亦若夏正を用ゐしより 本邦まで其
建支ハ微ひて。孔子も夏の時を行ふと顔回ハ宣ひつ。今を
周正ハ用ゐもして。夏正ハ依て定る。佛生日ハ當代の四月
八日なりと明らけし。慈鎮和尚の歌ハ

百敷の賀茂の御形の社のもの内ハ仏の身とも猶覧べる

加茂の御形とハ山城国愛宕郡ハ鎮座ましまして。加茂別雷皇
太神宮の祭り。毎歳四月酉の日。其前日酉の日の石上ハて。
神事あり。御形と号を。神代ハ玉依姫の別雷神を生ぬひ
所なりとそ

十二 摩耶夫人薨去并 眞宗火葬を行ふ始

太子降誕ハ二十二の。瑞應 諸天神龍王兄弟空中ハ現ゝ。この它さぬくあり事無量ハ器しぬ世ハ三十
四の瑞と。太子降誕ハ三十二ヶ所 現ゝ。ハも最奇なりし。當日釋種の五百王の后妃
皆懷妊ハ男子を産。及其廐の馬。悉く弱を生。何も咸色純白
て。騣騮孫を貫けり。別て迦毘羅城ハ生ゝ。廐の弱駒絶なべ。
名を犍陟と号く。今る往ハ浄飯王ハ。翌日群臣嫁女を隨ゝ王
子を將ひて天廟の天像ハ謁ゝ。ハふ。奇なる哉番ハて。
刹ゝる梵天像。坐より起て恭ゝく王子の足を礼ゝ。ひつ。浄飯
王ハふらち向ひて。大王ハ未ざ識ぬえ。王子ハ天人の中の最尊
なり。虚空の天神悉く。礼敬せざる者やゝ。然るを遠処ハ来ぬ人
て。俺を礼させんとなるひてハ人ひハ違ゝと宣ふ。王を。
供奉ゝる群臣嫁女何頭然ゝる服と服を互ハ見合ものゝ再

同えんも有樂あて。王子を傳ふ抱うせろ。廟の前を避さるべ。
天像ハ坐ふ着て。舊の本像ふ変ること。法る未考有の奇事
わる。天資神助の王子ふ在せど。淨阪王ハ猶も糸。擁護を深く
祈りのひて。祇て龍駕ふ乗のひ。王子と與ふ還淨をのふ。備も
后妃摩耶夫人ハ。最安らけき淨産の後。神身悩をのみふ有ねど。
何と中〳〵氣力竭て。飲食も欲しのなて。尊膳眠のひつ。憔悴ふ
目のくべ。王の膝慮も安んドのハを。余まバ糸。橋曇弥夫人ハ。
王子の與ふ賢明ふ。乳母を推て傳うせ。其身ハ青龍殿ふ
住のひて。晝夜とも ふ看病のひつ。復回も兄姐の罪を。慚愧後
悔しのくべ。天地ふ祈ひて妹夫人の患病平愈を祈りのみふ。
丹誠を尽しのく。定業ふ其甲斐なくも。太子せ。
のひ一日うり。七日立ぬる暁ふ摩耶夫人ハ姉后と傳烏將軍

夫婦をのく。枕の邊ふ招きのひて。目宿世の戒行伴美く深も
大王の寵を蒙て。人くふ尊敬せらるて。所有樂を極し
うくふ。王子とさく。尊奉てしハ。此上あき幸福ふ待しも。既ふ
現世の縁ハ尽し。垂迹の都へ。解り侍ると。一念不生の心ふハ。
遂も垂昭もふく。煩悩即菩提。生死即涅槃と放聽たべ。
憎しと思ひ愛しと。思ふ心も捨らねば。殘らん氣をも捨ねし。
遮莫太子の淨身のうへのこと。姉君のもん慈こを。只願ふ願ひ
まつ〳〵。鳥將軍夫婦ハ今日ようして。目のごとく姉君ふ傳き
仕へ奉りて。太子成長ありつも。ふ善もん行途在きべ。落め
正し奉て上。將この身の亡骸ハ。夕陽山ふて茶毘を営う。墳
墓ふ垂憂樹と。種させのへと大王ふ。養して預奉るべしと遺云
を仰のひつ。端坐正念合掌して。瞑ずるに。摩耶夫人ハ。橋曇弥

夫人爲將軍夫婦ノ。慈歎悲泣リ〳〵ベ更ヌル。宮中の女官ども。爲夜ヲ灯を失ひし。心地せ〳〵まて狂轉び。泣哀む聲〳〵ハ。宮殿の外まで聞えり。余まべ階老のおん契濃ヌル〳〵夫人の驚去と。関しめしのよう。淳仁王ハ昔とをうヲ。歎き悲そのひ給ふ。同ド路ヲと思しのひて。行源ヲ免びぬくバ。二大臣百司百官。後宮の女官。嬪女まで。涙ヲ袖をぞ絞りける。彼て果べ死車ヲ〳〵ねバ。淳仁王ハ。おん涙ヲ。禁ひ沈〳〵ぬひつ。青龍城〳〵行幸めりて。后妃の亡骸を膚覧ヲ。花の王顔生るがごとく。出ニも容色愛〳〵ざるをバ。愛ヲ名の会を禁め難ぬひて。遠俗宮中ヲ留めまし歎〳〵思ふ石ぬ〳〵ども。法下の孫養默止ぐ〳〵裏亡骸を膚ヲの。棺ヲ収て遺云ふまバ。青龍堪の外方ある夕陽山ヲ郊送して。竟ヲ膚薪をもて葬毘しヲ。ふりり。噫名花一朝の嵐ヲ散て夕陽山下の夕烟と消ぬひしそ哀ある。是火葬の法ヲして。今本邦一向宗の。専行ふ所ある。抑天皇ヲ火葬法四あり。水葬土葬。林葬火葬等ある。

皇国上古ハ火葬ありて。其形躰を焚傷ふてあし。

膚土葬ヲして安厝のそ。文武天皇四年ヲ。道照和尚遷化しヲ。

遺ヲ門遺言ヲ従ひて。骨系ヲ火葬しヲ。遠葬法。皇国ヲ始まる。是ヲ次で大寶二年ヲ。持統天皇のおん亡骸を。花の園ヲ火葬しまる〳〵ね。是天子火葬の始ある。備も葬毘しまる〳〵しなる。

摩耶夫人の玉骨を。七宝の壺ヲ納て。邪ち夕陽山ヲ望葬し。盛毘尼苑の青瀧殿を。其所〳〵引移して。十六丈の宮殿を建立し。廟前ヲ垂優樹を移し。植させ給ひ。後年佛世尊滅道して。国ヲ還幸しのひしと。此遺所ヲ役ぬひて。摩訶摩耶山忉利天正寺と号けぬひぬ

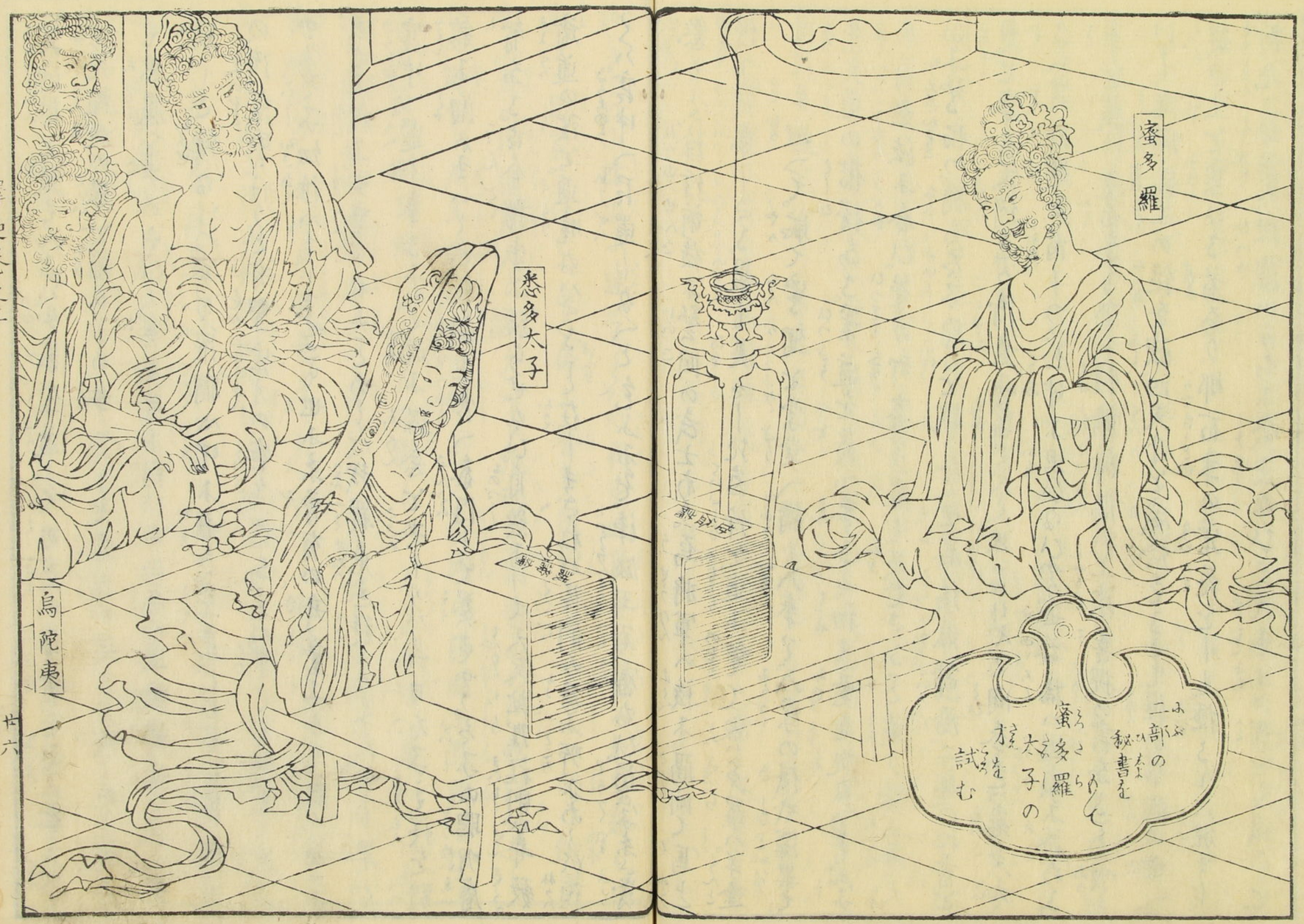
十三　悉多太子入学并神祇相好を顕示す

却説憍曇弥夫人い太子降誕の。其日より預まりて。月累懈〻
構まつらせ。妹夫人の敵果あくも。世を早くせしをうらみ。傷く
も驚ふ甚なるぬる。嫉妬の罪を懺悔しぬひ。責て太子を實子のごとく。
慈こ育てまつる。罪の償ひ有べう〻ぞと思ひ。ひたすら困苦。後宮の侍女
ども。傅ふ守育てまつる。実の母ふ異なる。浄飯王も太子の與ふ。稚
種の女数多を撰て。才色優さしき者をのみ。二十二名指出し。新ふ
太子の傅の。助ふ加へ給ふ。中八人。太子守抱の。乳母。
八女い太子洗浴の司。八女い乳の司。八女い飾衣の相手
しの人。浴さい衣裳服飾ふ。花麗を極むといふ。美しく。
紙ふ譬耶夫人の。憂去ぬひしも。北須と思ふ間も。重く身を立て
太子ハ二才ふ成ぬひしが。凡體ふ在しまさねば。其容貌ふ七歳の

童子ふも超ぬひて。佛古諸ふん動止。天然法則ふ合ひ。天性の美質
玉の像。ふん顔光輝ふ。王のふん喜悦斜ふ〻。文道の博士ふ
勅して。太子の佛名を撰せ。博士ども奉りて種々ふ商議
しつ。太子佛降誕ませし時三十二の瑞應および諸の奇特。
達せぬとりふ事。重し。因て佛諱を悉多太子と。謹奉らむやと
奏しつるに。浄飯王。感まし〻。這名朕が意ふ合ひ。寔ふ可と
宣ひて。博士ふ恩賞を賜ひ。是より悉多太子と称し奉りて。諸
人の尊敬大〻なる。ぞ。栄く愛〻く生立ぬると見るふ。就ても烏將軍い。
摩耶夫人世ふ在さば。嗟や悦びぬらんと思ひ出て。妻と諸譚ひ。
夫婦斉一懐抱の。涙ふ。濡る日も多り。却て年月を経る。程ふ。太子五才ふ
成ぬひし。其春加冠の儀式あり。七歳ふ。成ぬひしが。一年より。絲竹礼楽
諸般の技藝を学びぬひしが。一月ぐも。満ぬして。悉く。妙所を

寔め其蘊奥を悟覺めへ。師範なる者撃歌して。是凡人なれ在
まさむと。吾と卷ぬへ亜りけり。翌年八才ふ成めへ。淨飯王ハ左
子の與ふ文道を学まつき。師範を就ふ為ぞや。群臣ふ勅問
しめふ。月卿雲客奉ずて。當時博学多才ふして。善諸論を知
るものハ。蜜多羅ふこそゆくと。（贊頭賢佛も此ハ佛本行經ふよりて蜜多羅也）斉一奏問しめるまで。
直ふ蜜多羅を徵めひて。師範なるべ紀有勅掟あり。備左ふ文学
修行の友と成べき邑從ふハ。星光臣の嫡男烏陀夷今茲十三歳
ありけまども。賢明才智人ふ超る。因て豫て知しる成ふ徵ふ
めふまで。是光父子ハ身ふ餘る。面目を布して。烏陀夷ハ月景城へ
昇けり。遠它優才の童子邑從を十餘名撰出して。吉日良辰ふ蜜多
羅ふ學堂ふ昇めふ。其行粧花く麗も玉のごく美し紀童男童
女百人九右乳母女官と共ふ侍ふたるの輦車ふ隨從して列を成さむ

慇々と。徐行前後ふ警固の武士あり。烏將軍ハ後ふ隔同て馬上
優ふ從奉しる。最も美々し紀有体を選ふ望て蜜多羅ハ羊途
まで出迎て。躬て寄駕と学堂へ。請て入奉て。入学の儀式濯畢て。
先文道の楷模なる筆道を教へ奉るふ。初て毫を執めへども字
形自然法ふ合ひ。筆力加蜜多羅も及ざること遠ければ在津大
ひふ驚ぬ怕つ。猶も左子の才を試んと。世益論。瓔諦論二部の秘書を
見せ奉りて。何を心御意ふ学むと。思ひけやと問奉まへ憑多左
子ハ。其外題を商しつ。玄中ふ思ひぬひ。世益論ハ国家ふ益ある
事を載たる書なるべし。瓔諦論ハ上求菩提の書なること明
けし。九轉輪王の位を淺四天下を威伏をるとも。涯ある假の世へ。
綾き生を稟たる者なり。那百年の榮花をしも。極るとハ能まじ
抑九が母君ハ。禄源のうちふ薨去めひて。只半日の榮をも微さむ。


蜜多羅
悉多太子
烏陀夷
二部の秘書を
蜜多羅太子の
核を試む

其法恩を報ぜんふハ。出家学道して母君の尊霊を慰め奉り永く
生死輪廻の界を離らしめ奉らんこそ孝道の端ふも儀〳〵めと聴く
も思慮を決めぬひて。密多羅ふ対ひ申ひ。尤ハ遠慮謙徧と学ま
欲しと仰ぬ〳〵ハ。密多羅猶心中ふ嘲き。原来この君出家得道
の。清望ありけりと。有繋宏才の密多羅なまハ。早くも知覚て思ふ
ゆうたくふ幼稚ハまし〳〵ませども。世ふ来胄有の奇童ふあり。既ろ留学
志ぬふ程ふ。出塵しぬふとあ〳〵ば。我罪免まと発ろりふん。如じ早く
宮中へ。還し奉るふハと既ふ深念を決しうハ。其日をみて後を別
離ふ留めまいらせ。諸朝王宮へ。参内して。密多羅ふ聴明齢
智ある。古今獨歩ふ。諸らせぬひ。自然ふして天文地理。礼則算数
諸道の理を。通暁ぬハぎること在しまさねバ。民们ぐ及ぶ所ふあ〳〵。頼
〳〵ハ宮中へ。民還しぬくとを。ふふそ。浄飯王ふ審ぬひ。留学未だ義

許あ〳〵ぬふ。諸道ふ達せり〳〵ハ心得ぞ。遮莫密多羅ぐ教導雖くハ
孰をか師範ふ任ずべきと命ふ密多羅惶こたふの師と仰ぎ
ぬふ者ハ。神通廣大と聞えし。維耶里国香山の阿私陀仙ふ〳〵
でい能ハず。大王這神仙を。徴ぬくと。密聞を。浄飯王黙頂ぬひつ
密多羅ふ暇を賜へ。官人们数百人。たふを迎へ奉りて月累
撫〳〵還させぬふ。諸香山の遠きこと。洛飛数千里隔ち〳〵。間ふ急
流嶮山多くて。往来甚難う〳〵ねバ。誰とか勅使ふ遣べきと。終ふ
日をの〳〵送る程ふ。彼阿私陀仙人ハ。数千里を隔ちて。香山ふ在
ふ〳〵〳〵立通を具足〳〵る故ふ。王の意を知て。雲入勝て驟く
間ふ。迦毘羅城へ。飛来り。我ハ香山の阿私陀ふ〳〵。名告り。即然き
宮中へ。拝〳〵入ふそ。浄飯王見喜び。ひつて。百官と倶ふ殿
上へ。迎へて。対面しぬふ面ハ東の塾へ。ぐ〳〵。両眼畢ろ。輝きて。

髪鬚皆紫なり。寔に人外の真仙と。孰か尊び仰ぎざるべき。王も深く
尊敬しぬ。當下阿私陀仙ハ王に對ひて。曩に右子降後の時。大光
明を放ちぬ。大地六種に動し。故に香山の遠近に在ども大聖出
現せりと。預て知覚ゆ。今亦老病のことをしも。大王に奏し。
是密多羅が一時の方便。老病に右子を相さして。大王に告奏る。
偉の必ずあるべし。右子に見参奉らんと。稟せば淨飯王聞ひ
直に阿私陀仙を伴ひ。ひて。月景城に行幸あり。情曇弥夫人新と
聞て。悉多右子を連ひ。俱に仙人を迎へ。ひて。礼を作さんと
しぬ。ひて。阿私陀急に推止めつ。右子ハ二界の至尊なりて。其
軀恭しく合掌して。右子の足を礼拝まつ。王も夫人も清心に敬き
ぬ。ひつ猶も亦頻に観相して。猶未の福善悪を示しぬと命
ふ。神仙形を縮しく。右子を熟相して。忽然悲泣して生まれ

王も夫人も驚愛ひ。右子に何の因縁ありてか。泣悲しむと問ふ。
阿私陀答へて。吾とよ因縁ハ在しまさず。相好異しぬ。
寔に天人のごとく在せり。抑三十二相皆具足を得て。亦淫
明に願ふ。一人ハ必一切種智を成ぜり。右子遠相圓なれば。疑て
正覚を成しぬ。ひて。天人を済度しぬ。ひつ。恨らくハ老病の年。
百有二十に遠びぬ。久しくして命終の後。必相天に生まれば。
仏教を聞奉らず。遠故に悲むのみ。故に泣悲
ふ。ひて。ひて。と。ことまと。初に淨飯王ハ。半ハ喜び半ハ憂ひ。法を好相の
福ありて正覚を成ずと。亦聞ふ。阿私陀仙ハ。天機漏すべからずと。言て再び
雑たまと。忽然として没し。雲に隠て虚空に昇り。彼方遥に去ぬ
聞ふ。老て死さるを仙と。仙ハ僊と。仙ハ僊と。遷て山に入故に云と。

もろふ人まして山に傍ふして新名に見えつつ熟まるも阿私陀が自命終の由を聞くに縛は瑞應記にあり紀といへども世の人あまねく壽の涯なるものの故天地の長なりけるも十二萬九千六百年を一元として一回終る凡物くして終る理はあらざるまし

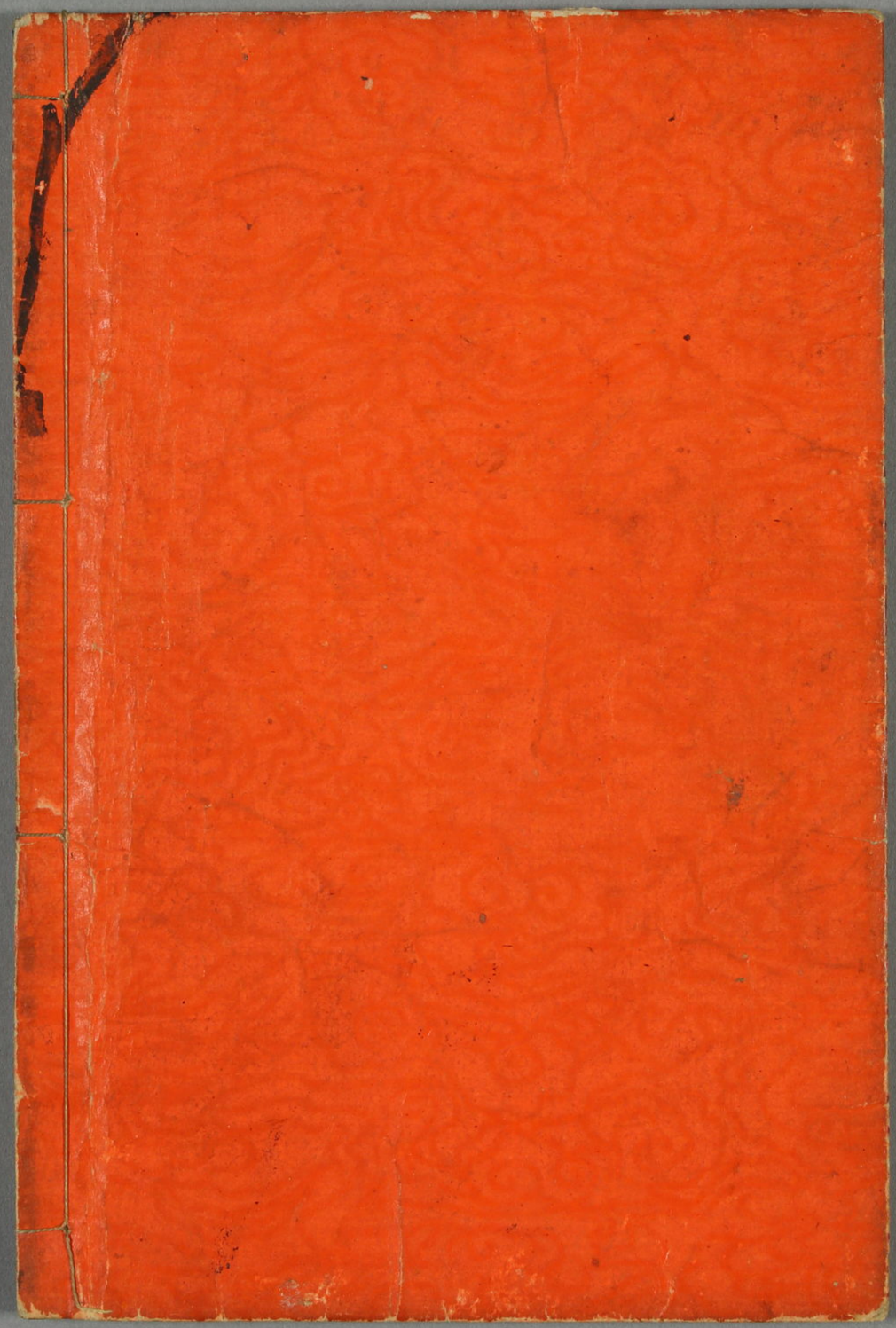
十四

右子諸藝通曉并提婆佛法を妨る始

再說阿私陀仙人が右子の相好を見て死去し限に淨飯王は倩思惟のあまに一切種智を識して天人を淨度せんといふが如き出家の相明に顯はるるあるべきもそれ加以昔摩耶が夢想の占に相師が父白象右の脇より入と夢れば二界に拔奇き尊子を生て千萬の衆を度脫せんと記したるを思ひ合せに未世以前の自然稟繼厭離の心あり欲遊奥速に出家得道の志を記しもせば別に世嗣あるべきと奈何せん片わも右まも出塵の心をもさせぬ如と

るべと憍曇弥夫人に縛の心を示しぬひて迦毘羅城へ還帰しぬひしより容貌端麗き未通女と五千人擇ぬひ右子の侍女として且暮に歌舞吹彈して右子の心を慰めさせぬひしより是その娛樂をもて厭離の心を覆させしいしの脣慮ありとて茲に新種の氏族ありて思天と喚做を若わり善兵法武技に長て二十九種の中華の十八般皇國の武藝八流の新流善巧妙術を有ち當時双ぶ者も無き武道の達人ありけるを以て右子の師範に命じぬひて四方一里除ある園を造りて勤劬と号け教導の場に備けり今をば勤劬園に烏陀夷をたづめ自餘の扈從に右子に傳き俱に武道を學ぶ程に五百の新種の子も悉く貴子たちも遠処に集合て共倡に學び習に中にも月を重ね年を積つ熟に熟に一般なりしが獨悉多右子のみ四年の間に思天が教を悉く得ぬひて通達せざる技もなく神力も亦無双に在せば大象

驚き怕れり。一日諸童子別堂に陽を蔽して射術を学び、羊は遊戯
する折しも、一群の雁空高く疎行を作て腦仰て、提婆達多に弓に
箭刻ひとつ引張と發つ一箭に、一羽の雁を射落しに、殘る雁は大く
驚き乱て、翼天遥に飛去ぬ。射られし雁は箭を帯て、間隙遠く飛在
しを、たゞの前に墮てんげり。這為体に悪多たゞは、憐しみ泣て件の
雁を、自ら膝に安ぬひ、箭を抜のゝて傷痍を、懇密もて対治しぬひ。
四辺さだめと思ひ処に、提婆は従者を引連て、たゞの邊へ拭こ寄。
汗は方僅那方にて小可が。射て落しこる雁なるに、遥與しぬくと
いよ良をたゞは緩に見くりぬひて、汝の本事は感ぶこと那までも
比類なし。射術を他に示しこそ、雁に用は無くべく。たゞは安くと
宣へば、提婆は首をうち振て、偖使たゞの所望ありとも、何を那で
懷らんや。將歸て肉を喫たん。返しぬくと焦燥ども、たゞは獨叫喜て

たゞ生を害して樂しむ。畜生殘害の類に、人萬物の霊なる
者、自慚愧て戒めざるんや。禽獸なる夫婦親子の情ある故に死を
畏る。死を恐る故に人に別深まで若人迫よまば速く死は是命
を惜めばなり。殺に二枝殊に雁は四徳の名あり。遊戯に
命を弱べ、海に射て捨ら邊に。隨しも是因縁あり。生に因
して去る欲を。遮莫命数茲に盡て因死に返さんのこと宣
ひつゝ傷痍雁の両翼を正の掌りて、二三回撫ぬくば、件の雁も
忽然と甦て、おん勝を。下りつゝたゞに向ひ、完し礼拝する
こと五体投地巡しつ。一聲啼て翼を開き翠天に高く
飛去ける。這光景を見る者、叫く者。且感じて、たゞ子
の仁慈顧德を嘆賞せざるも無くば。射術の本事を願
しこる。提婆達多に却て面目を失ひし。心地せるまて頻腦し。

要なれ西屏骨折りなと謟きるゝ従者を將て勤命園を
退出ふけり是佛法を妨けふ怨讎を結ぶ最初なり遠後射
御の勝劣箭の井の故事相撲の負勝象隣坑の舊蹟を殘
さんと者子の智力ふ及ばざるを提婆が猜を懼るゝ澤の
義八宗門記立ふ緣無りなバ省略しつ